



秋のヴォカリーズ

卯月京

少女は哀愁に満ちた、ヴァイオリンが奏でるメロディに聴き覚えがあった。ヴァイオリオンの音色は昨日から聴こえている。店の向かいの広場からだ。少女はなんとなく気になり、店を閉め、ヴァイオリンを聴きに行こうと思った。どうせ祭りの間の店は開店休業状態だから、ちょっとの間は構わないと思った。

広場では、金髪で背の高い青年がヴァイオリオンを弾いていた。

少女は演奏が終わって、青年がくつろいでいるところに声をかけた。

「今、弾いていたのはラフマニノフの作品番号34の14ですよ？」

「ええ、そうです。ラフマニノフのヴォカリーズです。よくご存じですね？」

「母が、ラフマニノフが好きでよく聴いていたので、幼少の頃から知っていました」

「この村の方ですか？」

「ええ、そこの角で骨董屋を営んでおります」

「村のかたですか。確かに雰囲気がありますね」

そう言われると、少女は自分の格好を見た。チェニックにロングスカートにレギンス。この町の少女の平均的なファッションだ。

少女は恥ずかしがりながら答えた。

「なかなか、ここから外には出ないので、都市(まち)のファッションはよくわかりませんので」

「いえ、そんなことはありませんよ、似合っていますよ」

「ありがとうございます。都市(まち)から来たのですか」

「ええ、首都から来ました。そういえば、まだ名前を言っていませんでした。フランクです。芸大で音楽を勉強しています」

「アンナです。よろしく」

「さて、そろそろ演奏に戻ります。また会いましょうアンナ」

そう言うとフランクは再び立ち上がり、ヴァイオリンを弾き始めた。

アンナはそれから、何曲か聴き、店に戻った。

*

この村は、ヨーロッパの穀倉地帯にある。

今は収穫を祝う秋祭りが行われていた。秋祭りともなると村の中心部に人が集まり、村の外からも観光客が来て、普段以上の賑わいを見せる。

フランクのような大道芸人も多く集まる。稼ぎ時のようだ。

秋祭りは一週間に渡って行われる。屋台がいっぱい出て、最終日にはパレードも行われる。そのパレードを目当てに長期滞在する旅行者もいる。

飲み屋も祭りになると、人で賑わいを見せる。人々がワインやビールをジョッキで飲み交わす。

だが、そんな光景も秋祭りの間だけだ。普段は一応観光ルートにはなっているが村は閑散としている。

若者も少なく、先祖代々ずっと農業をやり続けている老人ばかりの町だ。

*

アンナは翌日も店が暇な時、フランクの演奏を聴きに行った。

フランクは広場で演奏していた。

広場はレンガ敷きで、大きな時計塔が中心に建っている。それを中心にパントマイム、手品など様々大道芸人がパフォーマンスをしていた。

フランクの演奏には、人が多く集まっていた。クラシックだけでなく、ポップなども演奏しているようだ。だが、アンナにはよくわからなかった。この村ではテレビもラジオも一局しか入らないので、アンナは村の外のことをよく知らなかった。ただ、アンナの耳にも魅力的な演奏だと言うことだけはわかった。

アンナがフランクに近づくと、フランクが声をかけて来た。

「やぁ、アンナ。元気かい？」

アンナは笑顔で応えた。

「元気です。フランクさんもお客さんがいっぱい集まっていますね」

「これで今夜の飯代は稼げました」

アンナは思っていたことを思い切って言った。

「フランクさん、うちに泊まりませんか？」

アンナは、ああやっちゃったと感じた。

が、フランクは気にもしないようで笑顔で答えた。

「本当にいいのですか。宿がまだ決まっていなかったから、厚意に甘えさせてもらいます」

「なら、演奏が終わったら、私の店に来てください。また、後で」

「また、後で」

*

夕方、フランクがアンナの店にやってきた。

「こんばんは、アンナ。フランクです」

「よく、来てくれました、フランクさん。うちは私の一人暮らしなので、部屋は空いています。

今、案内するので待っていてください」

そう言われると、フランクはちょっと面食らったようだった。まさか、女性の一人暮らしとは思っていなかったと見える。

「フランクさん、その階段を上ってください」

アンナは二階からそう言った。

フランクは階段を上った。

アンナは奥の部屋のドアを開け待っていた。

「父の使っていた部屋です。古い家ですが、掃除はしていますので。では、ご自由にお使いください」

「では」

フランクは部屋を見渡した。確かに建物は古いものようだ。レンガ造りで出来てから一世紀は経ていると思った。だが、まめに補修などもしていたようで、室温もちょうどよく感じているようだ。アンナが掃除をまめにしていたらしく、部屋はきれいだった。

「宿よりも居心地がよさそうで助かります」

「ありがとうございます。なんか不便なところがありましたら、仰ってください」

「ありがとう」

「もうすぐ、夕食になるので、それまで、その部屋で休んでいただければ」

「そう、させてもらいます」

アンナはドアを閉め、キッチンに向かった。

アンナはドキドキしていた。この家にお父さん以外の男性が入るなんて何年振りかしら。

キッチンでアンナはわくわくしながら料理を作りはじめた。

*

夕食ができ、アンナはフランクをキッチンに呼び、フランクと二人でキッチンにて夕食を食べ始めた。

夕食はシチューとサラダとパンと質素なものだった。

「アンナ、おいしい夕食ですね」

「ありがとうございます」

アンナはうれしくなった。

「アンナは、この町の生まれですか」

「ええ、そうです。生まれてから、この町を出たことがありません」

フランクの食べ方は優雅さも感じられ、この村の人とは違うとアンナは感じた。

「失礼ですが、ご両親は？」

「父は私が十歳の時に。母は二年前に」

「そうですか。今、お店は一人でやっているのですか？」

「ええ。母が活着ている時はもっと繁盛していたのですが、私一人になってからは、近辺から仕入れて、都市(まち)の骨董屋に売るのがほとんどになりました」

「さきほど、店を見せていただきましたが、いいものばかりでした。アンナには仕入れの才能があるのかもしれないね」

「いえ、子供の頃から両親の仕事を見てきて、その真似をしてきただけです。それよりフランクさんのことを聞きたいです。どうして、この町へいらしたのですか」

もう、アンナもフランクも料理を食ベ終えていた。

「そうですね、長くなるのでお茶でも飲みながら」

そう言われると、アンナは一瞬恥ずかしくなり、そして答えた。

「私ったら、話に夢中になり、食事が終わったことに気づかなくて。今、片付けてお茶を入れますわ」

そう言うと、テーブルの上を片付け始めた。

「今、リビングにお茶を持って行きます」

「ごちそうさまです。おいしかったです」

「満足ただけて、よかったわ」

アンナはキッチンの片付けが終わると、お茶を淹れ始めた。フランクは、アンナは家事に慣れていると感じたようだ。だから、黙って見ていることにした。

「それでは、私はリビングに行っています」

アンナはリビングにお茶を運んだ。リビングにはソファと安楽椅子がある。テーブルや棚、壁には、アンナの父、母、三人で撮った写真が飾られている。フランクは壁に飾られている写真を見ている。何か母の写真が気になっている様子だった。

「フランクさんは、どうしてこの村へいらしたのですか？」

「父から、よく、この村のことを聞いていました。今年で大学を卒業するので、卒業旅行みたいなものです」

「実際に来てみて、どうでしたか？」

「いい村ですね。食べ物もおいしいし、風景もきれいです」

「そうですか、私はこの村以外を見たことがないのでわからないです」

「あなたも旅に出ればいいと思いますよ」

「ええ、そうなのですが」

そう言うと、アンナの表情が一瞬暗くなった。アンナは話題を変えた。

「フランクさんは、大学でどんなことを学んでいるのですか？」

「主にヴァイオリンの演奏と作曲です。卒業後はオーケストラに入る予定です」

「素敵ですね、好きなことを職業にできるなんて」

「そんなことないです。オーケストラなんて、稼ぎも少ないですし。私もこの村のようなところでのんびり暮らしたいです」

「いえ、私は都会で暮らしたいです」

「なら、私たちが逆になればいいですね」

フランクがそう言うと、アンナは笑った。

「あら、こんな時間」

アンナは時計を見て、そう言った。

時計はの針は真上を指していた。

「では、私はそろそろ寝ます。また明日」

「はい、ではおやすみなさい」

*

その晩、アンナは同じ屋根の下にフランクがいると思うと、なかなか寝付けなかった。

父親と同業者以外の異性と話すのも久しぶりだった。

それだけにフランクの存在は気になった。

フランクの穏やかな物腰もアンナにとっては、心地良かった。まるで、死んだ父のようだった。

*

日が昇り、朝が来た。

アンナの朝は早い。

起きると、店の掃除をして、それから朝食の用意をする。

フランクは、朝食の用意ができた頃に起きてきた。よく眠れたようだ。

「フランクさん、おはようございます」

「アンナ、おはよう。アンナは早起きですね」

「ええ、一人で店を切り盛りするので、やることが多いのです」

「そうですか。なら、一人じゃなくて、二人でなら」

「いえ、お客様に手伝ってもらわなくても」

「いや、そういう意味ではなくて」

アンナは首をかしげた。

「一緒にお店をやってくれる人が早く現われるといいですね」

アンナは顔を赤くした。

「何を言っているのですか。それにこの店は私の代で終わりですよ。さあ朝食ができていますよ」

アンナはその話題をごまかすように、フランクと朝食を食べ始めた。

「フランクさんは、今日も昨日と同じ場所で演奏するのですか？」

「ええ、そのつもりです」

「なら、お昼になったら、お弁当を持って行きます」

「それは助かります。お昼はどこの食堂も混んでいるので」

アンナはお昼になると、弁当を作り、フランクが演奏をしている広場へ向かった。

広場では、フランクが演奏をしていた。

フランクは演奏に集中しているようなので、アンナは黙って演奏を訊いていた。

フランクの演奏が終わったのを見計らって、アンナはフランクに声を掛けた。

「フランクさん、お昼ですよ」

「ありがとう、アンナ。今日の演奏はどうでした？」

「え！私が来ていたのに気づいていたのですか」

「もちろんです」

アンナはなにか久しぶりに、充実した感覚になった。

「今日もよかったですよ」

アンナはそういい、ランチボックスをフランクに差し出し、二人で昼食を食べ始めた。サンドイッチと果物が入っていた。

「フランクさん、お茶はいかがですか」

「いただきます。今日もおいしいです」

「ありがとうございます。そう言われると作りがいがあります」

アンナは素直に喜んだ。

「今日の収入はどうか？」

「ええ、いいです。秋祭りも本番が近づいて、だんだん人が増え始めていますね」

「そうですね。パレードまであと二日ですから」

日が沈み、一日が終わった。

この村の、この時期は日が沈むのが早い。それだけに夜が長い。

アンナはフランクから、首都のことや大学生活の話をいっぱい聞いた。

「首都では、いま〇〇な音楽が流行っています」

「この町のラジオでは、そんな曲はかかっていないです」

「でも、私はクラシックが好きですが」

「だけど、私は一度、その首都で流行っている曲を聴いてみたいわ」

「大学では授業だけでなく、大学外でも先生と食事をしたりします」

「大変ですね」

「いえ、そうやって、先生の教えようとしていることを探っていくのです」

「大学って大変ですね。私は母が死んだ後は学校もやめてしまったので」

「それでも、立派にお店を切り盛りしているじゃないですか」

「ええ。でも、この村の小さな学校でも卒業しておきたかった」

「アンナはまだ若いからチャンスがあります」

そんな感じで、深夜まで二人で話を続けた。

アンナにとっては刺激的な話だった。

*

そうして、翌日はパレードの夜がやってきた。

二人は夕食を食べ終わると、またリビングで話を始めた。

「フランクさん、私も首都へ行きたいわ」

「どうしてかな、アンナ」

「何も刺激のない、この村。このまま、おばあさんになっていくなんて」

「でも、君にはこの店があるじゃないか」

「確かに、お父さんとお母さんの遺してくれた大事なお店だわ、でも」

「でも？」

「でも、それが時々、重荷になるの。お母さんは亡くなる時、お店は閉めてもいいと言ってくれた。だけど…」

「だけど？」

「だけど、両親の思い出がつまった店を閉めるなんてできないわ」

「なんとなく気持ちがわかるよ」

そう言うと、フランクはアンナの肩を抱きしめた。

アンナはびっくりしたが、それを受け入れた。

「僕は、この町ですずっと暮らしたいと思い始めている」

「なんで？」

「大学内の競争や、都会の喧騒から離れて、ここでなら作曲に集中できると思う」

「作曲？」

「僕は作曲家で身を立てたいと思っている。でも、都会だと僕は集中できない。ここに来てからも何曲か作曲したんだ」

「聴かせてくれますか」

「いいよ」

フランクはそう言い、ヴァイオリンを持ってきて、弾き始めた。

「なにか悲しいメロディですね。でも、なんとなくこの地方の哀愁があるわ」

「わかってくれて、ありがとう。この村のことは父から聞いていた通りの村だった」

「どんな村？」

「山があって、川と空がきれいで、いい人のいる町だよ、そして」

「そして？」

「そして、君に出会えた」

アンナはそう言われると、困惑してしまった。

フランクはそれ見ながらも意を決したように話を続けた。

「父は若い頃、この村に旅で来たそうだよ。そして、君のお母さんに会った。そして、君のお母さんに恋して、ここで一生を過ごそうと思ったそうなんだ。だけど…」

「だけど？」

「その当時、父には既に首都に婚約者がいて、首都に戻ったんだ。君の母の写真は、父の手帳に今でも入っている。この店の前で写したものだ。だから、この店もすぐにわかった」

フランクはそういい、棚に飾ってあるアンナの母の写真を取った。

「この人を見た時、僕は、この人に恋に落ちた。そして、今、君を好きになった。一緒になってくれないかアンナ」

「フランクさん」

アンナは一気に言われ答えに困窮した。

「明日のパレードが終わった翌朝、この村を出る。答えはその時でいい。ただ、明日のパレードでは一緒に踊ってくれないか？」

アンナは少し落ち着いて、

「お気持ち、わかりました。今は考えさせてください。ただ、明日のパレードでは一緒に踊ります」

フランクも少し落ち着いたようで、
「わかったよ、アンナ。まずは、明日のパレードを楽しもう」
「はい」
「今日はおやすみ、アンナ」
「おやすみなさい、フランクさん」
そう言い二人は別れ、床についた。

*

祭りの最終日。朝からパレードが始まった。アンナは母が遺してくれたドレスを着て、フランクと踊った。お似合いの二人に村の人には見えたようだった。

近所の人たちも口ぐちに言う。
「アンナ、きれいだよ。お母さんの若い頃みたいだ」
「いい人を見つけたなアンナ」
「俺のアンナがあんな男に...」
「幸せになりな、アンナ」
二人は昨日の晩のことは忘れて、いや忘れてはいないが、この一瞬を一生の記憶に留めようと踊った。

「アンナ、踊りがうまいね」
「フランクさんのリードがうまいからです」
「楽しいね」
「はい、男性の方とは初めて踊りますが」
「僕は、うれしいよ」
そうして、祭りはクライマックスを迎え、最後の曲になった。そして、最後の曲が終わった、刹那。

フランクはアンナの唇にキスをした。
アンナは気を失いそうになったが、彼の唇を素直に受け入れた。
「アンナ、愛しているよ」
「フランクさん、ありがとう」
そうして、祭りは終わった。

最後の夜は、ふたりとも何も話せなかった。
そして、朝が来た。

二人は朝食を終え、リビングでお茶を飲み始めていた。沈黙を打ち破ったのは、アンナだった。

「フランクさん、私の答えですが」

「アンナ、気持ちは固まったかい？」

アンナは意を決したように冷たく言い放った。

「フランクさん、一時の恋に迷ってはいけませんよ。あなたはやっぱり首都で暮らす人です」

「そんなことないアンナ。僕はここで君と暮らすと決めたんだ」

「フランクさん、ここにはオーケストラもありません、仕事はどうするんですか？」

「君と一緒にこの店をやりながら、作曲で稼ぐよ」

「その曲は売れるんですか？」

アンナはいじわるな笑みを浮かべながら、フランクを見つめた。フランクは何も言えないと言う感じのような表情になった。

「それは…」

アンナは何か清々したようになった。

「この店は私一人が食べていくので精いっぱいです。もっと現実を見てくださいフランクさん」

「わかったよ、アンナ。僕は首都へ帰ることにする」

「フランクさん、祭りの間は楽しかったです。この思い出だけで私は十分です。ありがとうございました」

「僕こそ、すまなかった」

あきらめたような顔をして、フランクは言い。二階に行き、荷物をまとめ始めた。

そして、一時間後、アンナとフランクは店の玄関前にいた。何度もフランクは店を眺め直した。

「さようなら、アンナ」

フランクは悲しそうな顔しながら言い、アンナは笑顔で、

「さようなら、フランクさん」

こうして、二人の時間は終わりを告げた。

アンナはフランクが見えなくなると、リビングへ戻り。母の写真を胸に抱きかかえ、泣き始めた。

「本当は、私、フランクさんのことが好きだったの。でも、あの人はここから私を連れ出してくれる人ではなかった。一言、一緒に首都で暮らそうと言ってくれれば、よかったのに。こんな、何もない村が私は嫌いなの。フランクさんのことは嫌いじゃなかった」

外から、ヴァイオリンの音色が聴こえた。

ラフマニノフの作品番号34の14、ヴォカリーズ。

あとがき

お初の方、また前作に続いて読んでくれた方、ありがとうございました。

前作「白い結晶と彼女」と彼女のダウンロード数が10を超えたら、新作を公開するとあとがきで宣言しました。

なんと、驚くべきことにそれを達成しました！

と言うわけで本作をパブーで公開します。

この作品はCと言う文芸誌の短編小説賞に応募してあっけない結果に終わったものです。

タイトルのヴォカリーズと言うのはクラシックのジャンルで、主にロシアで盛んな哀愁に満ちたメロディーです。

短編小説賞はもちろん入賞を目指したのですが、モチーフに関しては、たまたまアイディア出しの時に聴いていたのが、ラフマニノフのヴォカリーズでそれをモチーフにしました。

ラフマニノフはのだめカンタービレを読んで・見ていた方なら、多分聞き覚えのある作曲家だと思います。

youtubeあたりで「ラフマニノフ ヴォカリーズ」で検索していただくと、モチーフにした曲も聴けるはずです。

次回作ですが、年末の休みにかけて、パブーのために書き下ろしをしようかと思っています。

さて、次回は有料で50円ぐらいを想定しています。

まだ、考えがまとまっていないので、有料にしたら読む・読まないをコメント、メールなどをしていただければ。

（今、公開中の作品に関しては無料のままです）

卯月京

twitter: @uduki_kyo